

---

# インフィニットストラトス      忍ぶ臆病者

学生逃避

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニティストラトス 忍ぶ臆病者

### 【Nコード】

N6264Y

### 【作者名】

学生逃避

### 【あらすじ】

ISを使えることから、半ば強制的に入学させられた男、織斑一夏。幼馴染の篠ノ乃箒と再会し、数カ月が立ち四組に転入生が来るというニュースが舞い込んできた。その転入生は一夏や箒がよく知る人物だった。

処女作品なので、下手です。それでもよろしかったら、どうぞよろしく願います。

## プロローグ（前書き）

短いですがよろしくお願いします!!

## ブローグ

インフィニットストラトス、通称IS。現在存在している兵器をはるかに超える戦闘能力を誇る。

しかし、これには一つ欠点がある。

それは、女性にしか使えないこと。

これにより世界は、女尊男卑が当たり前の世界に変わった。そして、ある男もISによって変わったのだ。

???視点

「本当にいいんだな」

「ああ、構わないさ」

俺は、目の前にいる男にそう言うと、男は心配そうな表情をしながら椅子に座る。

「なら良いんだが、あいつらは納得してないぞ。今も騒いでるんじ

やないか？」

確かに納得しないだろうが、もう決めたことだ。変えるつもりはないし、それに最後にはわかってくれるはずだ。

…多分、…おそらく、……………うん。

「まあ、あいつらのことだから襲ってでも止めに来ると思うが、私が話しておこう。  
行っ<sup>て</sup>来い」

そして、俺は向かう。場所は……

IS学園。

## プロローグ（後書き）

…短い!!

短すぎますね（泣）

ですが、今後ともよろしくお願いします。

## 1 翼（前書き）

連続投稿です。少しは話を作っているので早く出せればいいな、と思っています。

では、よろしく願います。

## 1 翼

男はある建物の前にいた。そこはIS学園。しかし、ISは女性にしか使えないため必然と女子校となっていたのだが、あるニュースが世界に配信された。世界で唯一ISを使える男が現れた。その男の名は、織斑一夏。しかし、今此処に三人目の男が学園の門を潜る。

一方、世界で初めてISを動かした一夏は自分の姉であり、担任である織斑千冬の授業を受け終えていた。授業内容は、二組とのISの実戦訓練。そして今はIS訓練機の片づけをしていた。

### 一夏視点

「ふう、これで終わりですか？山田先生？」

「はい、お疲れ様です。織斑君」



俺に劳いの言葉を言っているのは、一組の副担任の山田先生。いつもあわただしく子供っぽい先生だが今回の訓練で国家代表候補生を二人同時に倒してしまう実力を持つ人。戦闘のときのように普段もしっかりしてればイイのに、神様もひどいよね。

「織斑君？どうしましたか？」

「いいえ！何にも！」

いけねな。山田先生が心配して顔を覗き込んで来て、その際に豊満な胸が揺れるわけで。

「お、織斑君！お、男の子だから仕方ないかもしれませんが。あまり見ないでほしいんですけど」

「あ！その。す、すみません」

そして、気まずい空気と沈黙が漂う。まずい、話題を変えなければ！

「そう言えば、朝にほかの組にも転入生がいるって話があつてんですけど、先生は何か知りませんか？」

「あ、はい。確かに四組に転入生が来るといことなんですけど、――」

「ですけど？」

「まだ来てないんですよ。連絡もなくて」

不安そうな顔をしながらいう山田先生。確かに心配だな。

「でも、織斑先生は『あいつのことだから心配しても無駄だ』なんて言っているんですよ」

千冬姉がそんなことを。それに『あいつ』って一体？

「山田先生」

「あ、織斑先生。どうしたんですか？」

なんてことを考えていたら千冬姉が現れた。いつの間にいたんだ。

「例の転入生が来たんでな、私がそいつの世話をしなければならな  
いんだ。だから、午後の授業は私の代わりに頼みたいんだが」

「あ、やっと来たんですか！いやー心配してたんですよ」

「千冬姉転入生ってい……」

スパーーーーーン！！

「織斑先生だ、バカ者」

清々しいぐらいの叩き方ですけど千冬姉、今何万もの脳細胞が死んだぞ。少しは加減をしてほしいぜ。

「何やっているんですか、千冬さん」

ふと千冬姉の後ろから男の声が聞こえた。え、男？

「お、織斑先生。後ろにいる男の子は一体？」

「こいつが、転入生だ」

「「えっ」」

「はい、そうです」

そう言った男は黒髪が目を隠すぐらいの長さで、身長は俺よりも少し低いぐらいで華奢な体つきをしている。そして、なんだか懐かしい感じがする。

「久しぶりだな、一夏」

「え、何で俺の名前を？」

「何だ、忘れたのか？薄情な奴だな」

なんか呆れられているみたいだけど、って千冬姉もため息つかないでくれよ。

「あの、どなた様ですか？」

「仕方ないな。おい、答えてやれ」

「はいはい、わかりましたよ。千冬さん」

おい！そんなことを言ったら千冬姉の鉄拳制裁が――、って言うてるそばから――！

サッ――！

え、避けた？

「おっかないですよ。千冬さん？いや、織斑先生って言った方がいいですか？」

「初めからそう言え」

バカ者、と小言を言う。

「お前今何やったんで」

「え、普通に避けただけだけど」

何サラツと言っているんだよ！あの千冬姉の出席簿を避けるなんて、

「人間技じゃない」

「それは遠まわしに人間じゃないって言ってるよな」

あれ？なんかorzになっているんだけど。

「織斑、こいつは打たれ弱いんだ。あまり気にするな」

「わ、わかりました」

「ええ！！いいんですか？！」

山田先生がおろおろしながら言う。そんなことよりも

「すまないが名前まだ聞いていないんだが」

「落ち込んでる人に慰めの言葉も言わないとは、貴様は鬼か……  
ああ、鬼の弟か」

ドスッ！！！！

ああ、今度は当たった。



「鬼とは誰のことだ？ぜひ教えてほしいものだな」

「すみません！だから、今振り上げている出席簿の下げてください！俺まだ死にたくない！！」

必死になるよな。俺だって死ぬんじゃないかって思うことあるかな。

「じゃあ、さっさと自己紹介しますか」

頭を掻きながら男がこちらを向く。

「本日からここでお世話になる黒翼こくよく斑鳩いかるだ。よろしく！」

## 1 翼（後書き）

……変じゃないでしょうか？

それが一番の不安です。

お駒がしいようですが、感想をいただけるのなら、お願いします。

## 2 翼（前書き）

今回は不安です。

大丈夫でしょうか？

## 2 翼

- - - 六年前 - - -

「一夏、元気だね」

「斑鳩こそ、またいじめられるんじゃないぞ！」

気弱そうな少年、斑鳩を心配する一夏。新しい場所で大丈夫なのか心配していた。

「大丈夫だよ。そんなに心配しないでよ、一夏」

「お前は弱いからな、何かあったら連絡しろよな！俺がすぐに行くから！」

「…それは篝ちゃんに言ってほしかったな」

斑鳩は一夏に聞こえないように言う。斑鳩は箒が一夏のこと好きだと知っていた。

知った時は驚き、そして自分のことのように喜んだ。だから、箒の恋が成就するように協力していたのだ。

しかし、箒はISの関係で一夏たちに何も言わず去ってしまった。

「斑鳩ー、そろそろ行くぞ」

「わかってるよ。じゃあね、一夏」

「おう、いつか会おうぜ！」

そして、斑鳩は一夏たちとの思い出の地去った。

## 斑鳩視点

「お前あの斑鳩か!？」

「あのって何だあのって」

全く失礼だぜ一夏。いくら俺が昔弱虫だったからって言っていることと悪いことがあるだろう。

しかし、俺も鬼じゃないから許してやろう。

「千冬姉聞いてないぜ！斑鳩が来るなんて！」

ドカツ！！

「何度言わせるんだ」

うわぁ、千冬さんマジ千冬さん。相変わらずの鬼のようになにに怖いな。

「黒翼、お前、まだくらいいたならもう一度やってやろう。うれしいだろう」

「いいえ！一夏はうれしいだろうけれども、俺は全然うれしくないですから！！」

なんで分かったの、織斑先生。

「お前も一夏みたいにわかりやすくなったから分かったんだ」

さ、さいですか。そうなんでしょうね。最近、姉さん達に考えていることがばれる回数、増えているし。なんだか変わったよな、いろいろ。

「いやあ、変わってないな」

なんだか視線が集まっているような気がするんだよ。

まあ、男が此処にいるなんておかしいしな。一夏は気にせず話しかけているので、俺も視線を気にしながらも話を聞いている。

「斑鳩は変わったな。お前もISを動かしたのか？」

「ああ、さらに専用機も有るのさ」

俺は腰に鎖の付いた懐中時計を一夏に見せる。色は灰色で鳥の絵が描かれている。

「へエー、ならあとで模擬戦しようぜ」



「いいが俺は強いぞ。瞬殺しちまうぜ」

「負けないぜ！」

こんな会話をしながら俺達は屋上に向かっている。

なぜかと言うと箒が昼飯と一緒に食べようと一夏を誘ったらしい。  
十中八九二人つきりで食べたいと見た俺は断ろうしたが・・・

「大丈夫だって！みんないいやつだから」

と言うし、わかってないよこいつおそろく。ほかの女性も誘った  
のだろう。

全く変わっていないね。箒がかわいそうだな。

「一夏」

「何だ？」

「予言してやる。いつか箒に背中を刺されるってな」

「は？どついう意味？」

なぜわからないんだ、このバカは。

「やはり、お前は少し変わった方がよかったよ」

「??？」

そんなくだらない話をしている内に屋上に続く扉の前に着いた。

「しかし、屋上が開放されているなんてな」



けれども」

「そんなに眉間にシワを寄せていると老けるわよ、箒」

クツ！こいつら、私を心配しているが顔がにやけている！一夏、お前は微塵切り決定だ！！

トントン！

？ん、何だ？

「篠ノ之さん、ごめんね、本当は一夏と二人っきりで食べたかったんだよね？」（小声）

「い、いや！そんなことはありえない！！」

「クス、そういうことにしておくよ」

「それにしても一夏さん遅いですわね」

「何か山田先生と訓練機を片付けているみたいだけど」

それにしても遅い。ま、まさか、私の約束を忘れてほかの女子と  
なにかやっているんじゃないか!?

「一夏さん、大丈夫でしょうか!」

「大丈夫でしょう。あの馬鹿を心配しても無駄よ」

「あら、鈴さん。他人を心配するのは普通のことだと思いますわ」

そして、睨み合う二人。背景に炎が似合いそうな雰囲気が続いて  
いるとなにやら話声が聞こえてきた。

この声は一夏の声だ!ん?待てよ。一夏は誰と話しているのだ。

此処はIS学園。つまり女性しかない。話しているのは必然的  
に女性になる。

「「「一夏(さん)!」」」

さっきの雰囲気はどこにダストシュートしたのか、三人がシンク

口した。そして一夏が屋上に現れ問い詰めた。

「一夏、いつまで待たせるのだ！それにさっきまで話していたのは誰だー！」

「お、箒。実は斑鳩が来たんだよ」

「斑鳩？どこにいるのだ？」

「なに言っているんだよ。俺の後ろに……あれ？」

「誰もいないではないか。あれ？では誰と話していたのだ？」

そう言いながら一夏に近づいたとき

「うわぁー!!」

「箒！ってうわぁ！」

後ろから誰かに押され体勢を崩し一夏もろとも倒れてしまった。

「痛たた」

「大丈夫か？箒」

「ああ、大丈夫……」

そういいかけた時私は今自分がどのような状態なのか知った。私が一夏に覆いかぶさるようにつまり、押し倒すような体勢になっていた。

「ッ！！」

「おい、箒？」

ち、近いぞ！！一夏！し、しかしこの状態はいいかも知れない。これで一夏が少しでも意識するなら！

.....ここから箒の妄想.....

「なあ、箒」

「い、一夏！？そ、その・・・ち、近い・・・の、だが」

「いいじゃないか。俺は箒が好きなんだから」

そう言いながら一夏は箒に近づいてくる。

「私もす、好きだが・・・こ、こんな人いつ来るかわからない所で」



といいながら心の中ではドンと来い！と構えている筈であった。

「いいじゃないか。俺はもう我慢出来ないんだ！！」

「い、一夏！」

そして、二人の唇が少しずつ近づいていった。

.....妄想終了.....

「フ、フフフフ。し、仕方ない。なら私が最後まで相手になってや

る。私に任せろ！！」

「あー、箒？涎が出ているんだが」

「…………ハッ！しまった。何を不埒なことを考えているんだ。まだまだ修業が足りないみたいだ。」

「おい、箒」

「な、何だ！一夏」

少し声が大きくなってしまった。お、落ち着け篠ノ之箒。慌ててはいけない。

し、しかし少しは期待していいよな。

「そろそろどいてくれないか？重くて」

「…………」

「第？」

「フン！」

ドカツ  
！！！！

「グヘッ！？」

期待した私が馬鹿だった。この朴念仁がそんなことをするわけがないな。

「・・・プツ」

「ツ！？」

誰かに笑われたような気がした。しかし、セシリアや鈴はそんな様子もない。

デュノアも例外ではない。けれどもここには他に人はいない。

「箒、探しても無駄だよ。今は光学迷彩が起動しているから」

「だ、誰だ！」

「さっき一夏が言ってたじゃないか。俺が来ているって」

さっき一夏が言ってた？・・・アッ！

「斑鳩か！？」

「ハイ、正解だよ。よく出来ました」

そして、私の後ろにほっそりとした人の姿が浮き上がった。

「どうも、久しぶりだね箒ちゃん」

「斑鳩なのか！？」

「一夏もそんな反応してたね。さすが夫婦だね」

斑鳩が笑いながら言うが私の頭には『夫婦』という言葉でいっぱいだった。

「ふ、ふふ、夫婦!？」

「あれ？違うの？」

一夏と夫婦。い、いい！

.....はたまた第の妄想開始.....

「ただいま！」

「おかえり、一夏」

玄関に向かい一夏の荷物を持つフリフリのエプロンを着た箒。

「ああ、ただいま箒」

「夕食の用意が出来ているぞ。風呂も沸いているし、どっちにする？」

「そつだな、先になにか食べたいな」

「そつか、分かった。では」

そついい台所に戻ろうとしたがいきなり一夏に腕を捕まれた。

「ど、どうしたんだ、一夏」

「箒、俺は夕食を食べるとはいつてないぜ」

「では、なにを食べるんだ？」

「分かっているだろ。食べたいのは箒。お前だ」

「・・・!？」

顔を赤くし驚く箒。しかし、心の中ではバッチコーイ!と構えている箒であった。

「黙っているっていいという意味だよな」

「ま、待て一夏！？さすがにそ、その、あ、汗をかいているんだ！だから、せめてシャワーを浴びてから」

「もうダメだ！箒！！」

「キャッ！？」

箒を押し倒す一夏。その目は腹を空かした狼のようだった。

「一夏」

「いいな？箒」

見つめ合う一夏と箒。その雰囲気はだんだんと加速していた。



「ああ、いいぞ一夏。私を食べてくれ」

そついい手を広げ向かい入れる体勢をする。

その姿は官能に満ち溢れていた。

「じゃあ、いただきます」

一夏の顔が近づいていった。

.....妄想終了.....

## 2 翼（後書き）

どうだったでしょうか？

変なところは、・・・多々あったと思います。

箒ファンのみなさん、箒をこんな風に書いてしまつてすみません。

## 主人公設定（前書き）

主人公設定です。

話が進むにつれて変更などがあると思いますが、宜しく願います。

## 主人公設定

名前            黒翼    斑鳩    (くろよく    いかる)

性格は基本的には、おとなしく目立つのは控えているが知り合いには積極的になる。

方向音痴でよく道に迷う。

戦いになると無口になる。

顔は大部分は髪に隠れている。目は黒く、吊り上り睨めつけているように見える。  
(ソウル・ーターの阿羅を想像してもらえば良いかと)

家が武家のため、剣術、柔術、空手などをやっているため身体能力は高く、喧嘩も負け知らず。

簪とは婚約者であり、仲は良いが結婚までは考えていない。簪の

姉――楯無は苦手であり、会つと一目散に逃げる。本音や虚とは  
幼少期のときによく遊びこれも仲は良好。

一夏と箒とは小学校のころにいじめられていたのを助けられ、こ  
のころから仲良くなった。

家族構成は、母 兄一人 姉三人。父親は事故で亡くなっている。

### 3 翼（前書き）

初めて、感想をいただきました！

そして、最近アクセス数が増えてきています！

これからも、皆さんに読んでいただけるように頑張っ  
て行きたいと思  
います。

### 3 翼

えーっと、どうしようかね。箒ちゃんがヘブン状態になってて当分帰ってこなそうだし。しかも、涎を垂らしながらという乙女にあるまじきことを。

「ちょっと刺激が強かったかな？」

「おい、どうして隠れていたんだよ。あと、箒をなんとかしろよ」

「いや、恥ずかしかったから少し場を和ませた方がいいかな、と思つて。あと、箒ちゃんについては今はそつとしておけば大丈夫だから」

「ここまでの威力だったとは思わなかった。もはや、核兵器並だな。」

「あの、一夏さん。この方は一体？」

「私にも説明しなさいよ、一夏」

二人の女子が一夏に迫っていた。

「え、え」と。お、幼なじみの……」

「あ、紹介するよ。幼なじみの黒翼斑鳩だ」

「ど、どうも！」

一夏に感謝だな。女性に話しかけるのはどうも苦手なんだよな。

「女に話し掛けることだけは相変わらずだな」



一夏みたいに気軽に話し掛ければいいけどさ。初対面だから恥ずかしいしさ！なにが悪い！！

「いや、悪くないけどさ」

「なんでわかった！エスパー！？」

「幼なじみだからじゃないかな？」

なんてことだ！一夏にばれるなんて

「惨めだ！鬱だ！死にたい！！」

「俺にばれたのがそんなにショックなのかよ！？」

「ああ、そうだな」（キリッ！）

「ハッキリと言うな！！そのまま落ち込んでけ！」

何だよ、そんなに怒ることないだろ。それよりも

「彼女たちを紹介してほしいんだけど」

名前がわからなければ、なんていったらいいかわからないし。

「おっと、そうだったな。セシリア、鈴にシャルルだ」

「イギリス代表候補生のセシリア　オルコットですわ」

「鳳　鈴音よ。中国の代表候補生をやっているわ」

「ほうほう、彼女たちがお前の毒牙に掛かってしまった人かね。三人共ハイレベルだね」

「いや、一人は男だから」あれ、そうだったか。しかし、デュノアという子はどうも女性に見えてしまう。

「すみません。間違えてしまって」

「う、うん。気にしてない。僕はシャルル デュノア。今日、フランスから来たんだ。よろしく」

「これは御丁寧に。よろしく」

親睦の証に握手したが、デュノアの手は男とは思えない柔らかいものだった。やはり女性じゃないかな？

「さて、そろそろ昼飯にしようぜ。腹が減って」

「それもそうだな。このあと織斑先生に学園の説明があるし」

「織斑先生にですか？」

「何で千冬さんなのよ」

セシリアさんと鳳さんが尋ねて来る。

まあ、普通係の人に任せるのに俺がオロオロするから、特別に計らって貰ったなんて言えない！

「それよりも腹が減ってしょうがないんだよ」

「それもそうね」

「時間もおしているわけですしね」

「はい、一夏。これ」

鳳さんがタッパを一夏に投げつける。中身は大丈夫なの？

「バカ、食べ物を投げるな。おお、うまそうな酢豚だな！」

「今朝作ったのよ。感謝しなさい。何なら鈴様って言ってもいいわよ」

自己主張の無い胸を張っている鳳さん。何と云うか、非常に残念です。

「・・・あんたさ、なにか失礼なことを考えてたでしょう」

「いいえ。そんな初対面なのに胸が小さいな、なんて失礼なことは  
思っていないですから」

「きっちりかつちり思っていること言っているじゃないの!」

し、しまったあ!口が滑った!!

「あ、す……すみません!ない胸を張ったのでつい言ってしまう  
ました」

「一夏!こいつシメていい!」

ギヤアアア!さらに悪化させている!?

「落ち着け、鈴!斑鳩も煽るなよ!」



「さて、俺も食べるとするか」

バックの中から弁当箱を取り出し、ふたを開ける。  
ちなみに中身は一口コロツケ、ほうれん草のごま和えに卵焼き。  
そして、白いご飯である。

「へえー、うまそうだな。誰が作ったんだ？」

「もちろん、自分でだ」

「何だ、お前料理できたのかよ？」

「まあ、できるのにこしたことはないからな」

姉さんに扱かれたからな。やれ薄味だとか濃すぎると文句しか言わないし、俺は初心者だって！



「なあ、これ食べていいか？」

「構わねえけど、文句言うなよ」

「分かってる」

一口コロッケを手で取り、口に運ぶ一夏。

「お、旨いな！」

「ならいいが」

と素っ気なく言っているが内心、不安だったのは読者さんと俺だけの秘密だぜ。

なんたって家族以外に食べてもらったのは初めてだからな。あれ

？読者って誰？

「どうした、斑鳩？」

「いや、何でもない。なんか変な電波をキャッチしただけだから。それより、篝ちゃん。そろそろ戻って来ようよ」

篝ちゃんの肩を叩き、反応を見る。

「あゝ、一夏！そんなに激しくされたら私は……ハッ！」

「戻って来たか。お楽しみの中でただ篝ちゃん、昼休みの時間がなくなるからいい加減一夏にお弁当渡したら？」

「う、うむ。一夏、こ……これを！」

「お、おう」

一夏が弁当箱を受け取り、ふたを開ける。

その中には、鳥のから揚げにきんぴらごぼう等と和食のメニューだった。

「すごいな、箒ちゃん！おいしそうだな」

「かなり、手が込んでそうだな。貰っていいのか？」

「つ、ついでに作ったのだ！き、気にするな」

「けれども嬉しいぜ。ありがとう、箒」

「そ、そうか・・・」

なんかいい雰囲気になってるよ。いいね、いいね。最っ高だね！  
・・・なんかキャラが違うような気がする。  
しかも、オルコットさんと鳳さんはなにやら不機嫌そうだけど。

「一夏さん！私のサンドイッチもよければどうぞー！」

「あ、ああ。あとで貰うよ」

顔が引き攣っているぞ、一夏。

「一夏、どうしたんだよ？昔のお前なら喜んで貰うのに」（小声）

「い、いやあ。実はな、セシリアの料理は見た目はいいけどさ、味がすごいことになってるんだよ！」（小声）

「そんなことがあるわけがない。あんなにおいしいなのに」

「じゃあ、食べて見ろよ。セシリア、このサンドイッチ、斑鳩にやってもいいか？」

「ええ、構いませんわ」

どうぞ、と渡されたサンドイッチ。本当にまずいんだろうか。

「では、いただきます」

パクッ

「！！？？」

じ、これは！



「ねえ、黒翼くん。僕にもお弁当、少し分けてもらっていいかな？」

「ああ、構いませんよ。どれがほしいですか？」

「じゃあ、卵焼きもらえるかな」

うむ、デュノアくん。なかなかいい目をしているね。この卵焼きは自信作なんだよね。

「うん！美味しいよ！料理上手いんだね」

「そ、そうかな？」

「そうだよ！あとで教えてくれるかな？」

「い、いいですよ！俺でいいんだったら」

なんかデュノアくんすぐに仲良くなれそうだな。

「一夏さん、お口を開けてくださいまし！」

「一夏！食べさせてあげるから口開けなさいよ」

そして、一夏。あなたは一体なにをやったんだよ！

なんでオルコットさんと鈴さんが、あなたに乗りかかるような力オスな状況で、取り返しがつかないことになっているんだよ！

「みんな仲睦まじいんだね」

「いやデュノアくん、あれは襲い掛かっているんだって！？止めないと！」

以外とデュノアくんって天然？！

・・・いやツツコんでいる場合じゃない！早く止めないといろいろ大変なことになるって！

そして、波乱の昼休みが終わった。





### 3 翼（後書き）

簪がまだ出てこない（泣）。

しかし、次回では出すつもりです。

次回も読んでいただくと嬉しいです。

#### 4翼（前書き）

ようやくヒロインの簪が登場！

でも、うまく書けているか不安です。

では、どうぞ！

## 4 翼

「……という所で説明は終わりだ。何か質問はあるか？」

只今千冬さ……じゃなかった。織斑先生に学園について説明を受けています。

え？なんで飛んだんだって？それは作者の力不足ということです。して下さい。

ズバーン！

「私が話しているのに、考え事をするとはいい度胸だな」

「す……すみません。あ……後、質問があります」

「なんだ？」

「俺はどここの部屋ですか？」

これはとてつもなく重要な事だ。うん、死活問題だからな。  
願わくは一夏かデュノアくんと一緒に部屋に！

というよりも絶対にその二人のどちらかにしてください！

「お前には悪いが女子と同じ部屋になってもらう」

………終わった。俺の人生、十五歳にして終了か。俺が女性  
が苦手って知ってるよね！

ああ、なんか走馬灯が見えてきた。

「ああ……なんだ。ショックなのはわかるが、あまり落ち込むな」

「無理ですよ、そんなの。……なにニヤニヤしているんですか？  
！」

「なに、予想通りの反応だったからな。ちなみに織斑はデュノアと  
一緒に部屋と私が決めた」

「故意なんですか！確信犯なんですか！なら一夏をまた箒ちゃん  
と一緒に部屋にすればよかったじゃないですか」

箒ちゃんが大喜びするしね。

その方がみんなハッピーになるし。うん！その方がいい！

「そんなこと認められるか。一夏が襲われたらどうする！？私はまだ、一夏をやるわけにはいかないのだ！これは決定事項だ！」

「一夏の身を案じているんですね！？わかります！しかし、俺の身も案じてくださいよ！」

「だが、断る！」

ダメだ、どうしようもないくらいブラコンが進んでいるよこの人。もし一夏が結婚するようになったら姑以上にするさそつだな。

「大丈夫だ。そんな女は作らせないし、もしできたならコンクリートで固めて、海に沈めてくれる！」

「大丈夫じゃない！大問題ですよ！？」

本格的にやばくなってきたよ。逃げていいんだ、逃げていいんだ、逃げていいんだ！

・・・え？普通、反対だって？いや無理だって！！

「織斑先生。何をされているんですか？」

なんか助けが来た！確か、え〜と・・・山田先生！

「あ、嗚呼。山田先生か？今こいつの部屋を教えるところだ」

助かりましたよ、山田先生。今ならあなたを神と崇めてもいいよ！

「では、部屋の番号を教えるからそこにいけ。私は仕事が残っているからな」

「では寄り道せずに言うてくださいね、黒翼くん」

寄り道する所あるのかね？まあ、部屋については諦めるか。  
 なんかもう、世界の理ことわりみたいにな壮大なことみたいだし。

反対したら、命がいくつあってもたりないって。早く部屋に行こ  
う。

そして俺は足を進める。

[illegible]

- - - - -

「ここだな。・・・うん、間違えない」

教えられた部屋の前に到着したんだけど、

「ねえ、あの男の子ってあの噂の？」

「みたいよ。しかも、織斑くんと仲よさそうだったし」

「もしかして、織斑君とできているのかな！」

・・・女子の視線が痛いです。って最後の！  
俺はそっち方面じゃないからな！？断じて！一切合切！微塵も！！  
ここに居ても仕方ないし、入るとするか。

「し・・・失礼します。誰か居ませんか？」

入るとそこは高級ホテルのような部屋が広がっていた。さすがI  
S学園ということだろう。パソコンやらふかふかのベットがあるし。  
けど、部屋に誰もいないんだよな。織斑先生がいうには女子と同  
じ部屋だっていったよな。あれは嘘だったのか？だったら、感謝



しないとな！では部屋の確認をするか。

まずは、シャワーからかな。一夏が大浴場は使えないから気をつけろ、ってたからな。いざ、使おうという時に使えなかったらやだし。そう思いシャワー室に向かう。

「ほーう。なんか使うの、もったいない気がするな」

だってすごいんだよ。きれいで高級感が漂ってるんだぜ。こんな所に暮らすとなると、なんだか緊張するな。

「・・・誰か居るの？」

「ッ!？」

こ・・・声がしたな。しかも、シャワー室から。・・・となると今女子が使っている?!

まずい、マズイ、まずいでしょ!

「・・・本音?今・・・出るから」

しかも、誰かと勘違いして出てきそうだし!ヤバイよ、ヤバイよ! ああ、ドアを開けないで!

「・・・・・・・・誰？」

「あ、アハハッ」

ドアが開いてしまい、乾いた笑い声を出すしかなかった。  
中から出てきたのは空の青をそのまま写したような色で髪は肩までかかり、髪先はくせなのか、内側に向いている。しかし、どうしてだろうか。その子は俺の顔をまざまじと見ている。

「あのー、俺の顔になにか付いてますか？」

「・・・・・・・・斑鳩？」

「え、なんで俺の名前知っているの？」

「もしか、知り合い？でも誰だ？・・・・・・・・それよりも！」

「な、なにか、着てもらいたいんだけど」

「・・・・・・・・？・・・・・・・・！？」

自分の状態に気づいたのか、シャワー室のドアを壊れるんじゃないかという勢いで閉めた。

あ、ヤバい。鼻血が出てきたの。ティッシュは何処に。

- - - 数分後 - - -

「失礼なのは承知で聞きます。あなた誰ですか？」

「・・・本当に・・・覚えてない？」

そんな捨てられた子犬のような顔をしないで。

「・・・すみません」

「・・・グスン」

「あ、ああ！？泣かないで下さい！お願いします！なんでもしますから！」

「・・・ほんと?」

そんな捨てられた子犬の以下省略。

「本当ですって! 神に誓って!」

「・・・じゃあ、許す」

よかった。一気に肩の力が抜けたよ。

「じゃあ名前、教える。私は更識 簪。・・・覚えてない?」

更識 簪。・・・え!? もしかして!

「かんちゃん!」

そういつと簪・・・かんちゃんは俺に抱き着いて来た。

「えッ！ちょっと、かんちゃん！？」

俺の体に慎ましいも軟らかい物が当たってるんだけど！

「うん・・・うん！そうだよ、私・・・だよ。会いたかった、斑鳩！」

なんか抱き着く力がさらに強くなってるって！  
ヤバイ、鼻血が出てきた。

「かんちゃん、嬉しいのは分かったから離れてくれない？」

「・・・やだの？」

「そんなことはない！むしろこのまま、ベットに・・・ゲフンゲフン！」

何、言おうとしてたんだ、俺！まるで変態見たいじゃないか。

「・・・斑鳩」

「な、なんでもないよ！？気にしないで！」

「わ・・・私は・・・構わないよ」

「・・・はあい？」

なんって言った？もう一回？今の言葉、もう一度お願いします。

「だ、だから！私を・・・押し倒し・・・」

「ストップ！！ストップですよ、簪さんや！」

何言ってるんだよ！女の子がそんなこと言っちゃダメだって！？

「だって斑鳩に・・・ならナニされても・・・いいよ！」

顔、真っ赤ですよ、かんちゃん。俺も顔が熱くなっているのかわかるし。」

「でもそんなことしたら、ダメっしょ」

「・・・者なのに？」

「ん？なに？」

小さすぎて聞こえなかったよ。

「だから！こ、婚約者なのに？」

・・・そう。俺とかんちゃんは婚約者なのだ。

俺の家・・・つまり黒翼家とかんちゃんの家、更識家は親が仲が良く、困った時は助け合っているのだ。俺とかんちゃんもそれで知り合った。

それで両家の仲を堅くするために、お互いの子供を結婚させようということとなり次男の俺が選ばれ、更識家からは簪が選ばれたのだ。

「いや・・・婚約者だからって、それは・・・流石にまずいんじゃないかな？」

「・・・なんでもするって・・・言った」

今使いますか、それ！？拗ねた顔をしない！

「お願いします！他のことにしてください！」

「・・・分かった・・・」

いや、そんな残念そうにしないで。

「・・・それより、斑鳩はどうしてこの部屋に来たの？」

「あ、ああ。実はこの部屋に配置されたんだよ」

「えっ！？」



そりゃあ驚くよな。俺も驚いたもん。

「・・・じゃあ、一緒に・・・寝食を」

「ともにするだろうな」

・・・かんちゃんが固まった。まあそうなるよな。

「・・・本当？」

「本当」

「・・・マジ？」

「マジ」

なんか肩を震わせ始めたよ。と、とりあえず話を変えないと！

「かんちゃん！」

「・・・！？な、なに？」

少しびっくりした表情を浮かべていた。なにか考え事でもしていたんだろうか？

「とにかく、これから宜しく」

「う・・・うん！宜しく！」

そういったかんちゃんの顔は少し赤くなっていた。

#### 4 翼（後書き）

というわけで、ヒロイン登場です。

今後も簪を可愛く書いていきたいと思います。

P S 来週からテストが始まるので投稿は遅れます。  
誠にすみません。

## 5 翼（前書き）

アクセス数が一万を超えました！！

こんなド素人が書いた作品を読んできてありがとうございます！  
す！

これからも宜しくお願いします。

## 5 翼

朝の日差しがカーテンの隙間から入って来る。  
俺の隣のベットを見ると、

「ス……ン〜ス〜ン〜」

「……何で、熟睡しているんだよ」

簪がいる。俺は全然眠れなかったって言うのに。

「本当に無防備だよ、全く」

子供のように安心して寝ている。いつまでも見ていたい。  
そして守ってやりたい、そんな寝顔だ。しかし、そろそろ起きなければならぬ。

「……簪。起きろ」

「うゝん」

小さい頃に簪の家に泊まった時のことを思い出す。こいつは朝に弱く、起きてくるのが遅かった。

「ったく、仕方ないな」

簪に近づき、布団をはがす。

「ほら、朝だぞ！いい加減起きろ」

「うゝん？もう朝？」

目をこすりながら、起き上がる簪。  
なんか、ほんと子供っぽいよな。

「ほれ、顔を洗ってこい。そうすれば、少しはマシになるだろ」

「・・・わかった」

ふらふらとした、足取りで洗面所に向かって行った。  
ああ、転ぶなよな。全く世話が焼ける。  
しかし、こういうのを面白く感じている自分がいる。

「顔、洗った」

お、戻ってきたか。少しは目が覚めたかな。

「髪はねてるじゃないか。直せよ」

「・・・斑鳩、やって」

「なんでだよ。自分でやりなさい」

「・・・昨日の事・・・」

・・・それ言われると、なにも言えない。

「・・・ハア、わかったよ。ほれ、後ろ向け」

「・・・うん」

なんだか嬉しそうに声を弾ませる。

そして、髪を梳きはじめた。かんちゃんの髪を触ると軟らかく、そして女の子独特の甘い匂いが鼻をくすぐる。

なんだかドキドキしてきた！だがここは落ち着いて！

「痛くないか？」

「・・・うん。気持ちいい・・・」

かんちゃんの声まで甘くなってきた。

は、早く終わらせないと、俺の（理性の）リミッターが！

「・・・斑鳩・・・早く終わらせようとしてる？・・・」

「そんなことはないって（多分）。・・・これで終了つと。じゃあ、早めに着替えるんだ」

「・・・手伝ってくれないの？」





「じゃあ、俺は先行かないといけないから」

「・・・分かった」

「大丈夫、すぐに会うことになるさ。だから、そんな顔すんな」

「・・・うん!・・・」

さて、かんちゃんの機嫌も直ったことだし、職員室に行かないと。  
また、あの鬼の鉄拳を喰らいたく無いからな。

「ほほう。その鬼とは誰の事かな？」

「それは勿論、千冬さんしか・・・ってあれ？」

おかしいな？俺の前に、修羅すら裸足の全速力で逃げだす人（？）がいるように見える。

何故、ここに？

「私はこの寮の責任者だからな。それなので、お前の様子を見に来たわけだ」

そ・・・そうでしたか。それは、存じ上げませんでした。

「さて、さっきの話の続きをしようではないか？・・・鬼とは誰の事かな？」

「わ、わかりきったことを聞きますか、普通う！？」

言い終わる前に、千冬さんの鉄拳が剛速球の様に、俺の顔、目掛けて放たれた。

だがしかし、喰らう訳にはいかない！瞬時にバックステップをし、千冬さんから離れる。

「・・・うむ、なかなかいい反応だな。これも奴が鍛えたからか？」

「そうですね。死ぬほどしごかれましたからね」

このくらいならまだかわせるが、相手は世界一の女性。本気になる  
ったらかわせるかわからない。

「織斑先生、早く職員室に行きませんか？！そのために、来たんですから！！」

「あからさまに、話を変えたな」

「悪いですか？」

「・・・まあいい。ではいくぞ」

「・・・ハ、ハイ。じゃあ、かんちゃん。後で」

「・・・うん」

かんちゃんとわかれ、織斑先生の後をついていく。  
新しい生活が始まるのか。俺の心は少し高鳴っていた。

—  
—  
—  
簪視点  
—  
—  
—

もうすぐ学年別トーナメントが始まる。このトーナメントは全員が参加しなければならない。

それに・・・い、斑鳩がいるし。いいところを見せたい。

自分に励ましの言葉を送る。一人で打鉄式式を作り上げ、お姉ち

やんに並びたいという思いで、頭がいつぱいだった。

「はい！みんな、席に座って」

先生の呼びかけでクラス全員が席に着く。

「ホームルームを始める前にみんなにお知らせがある。昨日、うちのクラスに転校生が来るって言ったわよね？一日遅れたけど紹介するわね。――じゃあ入ってきて」

「失礼します」

教室のドアが開き、斑鳩が入ってくる。

「自己紹介してくれる？」

「はい。本日からここで皆さんと一緒にISを学ぶ、黒翼斑鳩です。宜しくお願いします」

斑鳩が自己紹介を終えると、クラスに沈黙が流れる。

「・・・どうした？男が来たからびつくりしたのか？」

「自分なにか変なこと言いましたか？」

先生と斑鳩が不安そうに言うが、次の瞬間

「「「キャア~~~~!!!!!!」」」

教室に絶叫が響く。

「ついにうちのクラスにも男が！」

「それにカツコイ系の！」

「ミステリアスでイイ！」

次々と女子の歓喜が出てくる。しかし、私の心はチクリと痛んだ。斑鳩は私の婚約者なのに、そんな考えで頭がいっぱいになっていた。

「それじゃあ、席は更識さんの後ろの席ね」

「はい、わかりました」

斑鳩がこちらに近づき、

「・・・よろしく」

「・・・うん・・・」

少しよそよそしい挨拶をかわす。これは斑鳩の希望で、みんなの前ではあまり目立つ事は控えている。

斑鳩はあまり目立つのは好まない。というか、嫌いでなのだ。私はみんなに斑鳩は私の婚約者と言いたかったのだが、私の前だけは・・・というのにも懂れていたので苦ではなかった。

これから斑鳩と一緒に過ごすと思うと、胸がいっぱいになる。

あんなことをしたいし、こんなことも斑鳩とやってみたい。そん



なピンク色の妄想を一日中考えていた。

「え、エヘヘッ。じゅる」

あ、いけない。涎が止まらない。

## 6 翼（前書き）

小説の難しさがわかってきた学生逃避です。

今回はかなりダメな文章になっています。

## 6 翼

「ふう、終わった」

初日の授業も終わり、俺は一息入っていた。転校生が男だから珍しいのだろう。質問攻めで参ってしまった。

しかも、かんちゃん突き刺さる視線があった。嫉妬しているんだとわかっているが、目立つのは嫌だから部屋で何とかしよう。

だが、その前にやらなきゃならないことがある。

「更識さん」

「・・・」

「済まないが、生徒会室ってどこにあるのかな？」

「・・・」

無視ですか。ムス、とした顔でディスプレイを見ている。

おそらくISの調整をしているのだろう。

「あ、黒翼くん。どうしたの？」

クラスメイトの女子が話してかけてきた。

「ああ、生徒会室はどこにあるのか更識さんに聞いていたところだよ」

「あ！そ、それじゃあさ！私が案内するよ！」

なんだか興奮しながら、言っているが近づきすぎだっただがなぜか後ろに引つ張られていた。振り向くと制服の端を掴むかんちゃんの姿があった。

「更識さん？」

「・・・私が・・・案内・・・する」

「で、でも更識さん忙しそうだし、アタシはヒマで時間があるし！」



生徒会室の前に着くと、かんちゃんはそのままだここに行こうと  
していた。

「かんちゃん、ありがとな」

「・・・気に・・・しないで・・・」

そついうと来た道を戻っていった。やっぱりまだ、楯無さんに引  
き目を感じているのかな。

でもやっぱり、姉妹なんだからいつかは・・・といけない！今か  
ら暗くなつてどうする。

このままじゃ、楯無さんに弄り倒される！

「あら？斑鳩くん？」

「あ・・・た、楯無さん。お、お久しぶりです」

目的の楯無さんが現れた。かんちゃんの姉でここ、IS学園の生  
徒会長。

おまけにロシアの国家代表でもある、出鱈目な人。まあ、うちの  
家族も出鱈目だからな。

「なんか失礼なこと考えてなかった？」

「なぜ、ばれたし！」

「お姉さんに隠し事は出来ないのよ」

扇子を開き、口元を隠す。扇子には『千里眼』と書かれていた。

「それにしても久しぶりね。元気にしてた？」

「楯無さんこそ、虚さんに迷惑かけてたんでしょ？」

「・・・さ、中に入ってゆっくり話でもしましょう。お茶もだすわ」

ナチュラルに話をそらしましたね。ということは凶星というわけか。

「そんなことはないわよ！お姉さんだって、胸だけ大きくなったわけじゃないのよ」

胸を見せるようなグラビアのようなポーズをとる。

かんちゃんとは対象的に、その存在は強烈だった。

「斑鳩くん、鼻血出てるよ。もしかして、お姉さんに欲情しちゃったかな？」

「そ、そんなことはないですよ！これは、そ、その・・・」

いい言い訳が見つからない！どうしたら・・・。

「あら、斑鳩くん？」

「あゝ、くろっちだ」

こゝこの遅い口調は！

「本音に虚さん！お久しぶりです」

た、助かった。グッドタイミングですよ、二人とも。

「くろっち、鼻血出てるけどどうしたの？」





「ハイ、どうぞ」

「あ、すみません」

虚さんが紅茶とクッキーをだしてきた。

「ずう。ああ、美味しいですね。」

「でしょ。虚ちゃんが煎れた紅茶は世界一なんだから」

確かにそうかもしれない。

こんなに美味しい紅茶は久しぶりに飲んだな。

「そんなことはありませんよ、お嬢様」

「お嬢様じゃないでしょ」

「そうでした、会長」

お辞儀をしながら虚さんは席についた。  
ちなみに本音はすでに座っている。

「ひさし〜ね、くろっち」

「お前も相変わらずだな」

とてもメイドには見えないな。

「虚さんもかわらずお元気そうで」

「ええ、ところで今日はどのような用件でしょうか？」

「虚さん、そんな堅い口調じゃなくてもいいですよ。小さい頃はよく遊んだ仲なんですから」

いくら俺がかんちゃん婚約者だからって堅すぎですよ。

「でも、そういうわけにはいきません」

「まあ、いいじゃない。ところで今日はどっいつ用件？」

「ただの挨拶ですよ。お義姉さん」

そう、楯無さんに挨拶するためにきたのだ。ただそれだけのために。

「あら、義理堅いのね義弟くんは」

そのように育てられましたからね。  
ミッチリと。

「ところでさ、簪ちゃんは・・・どうかな？」

「姉妹なんだから、自分で本人に聞いたらどうです？」

「き、聞けないから聞いてるんでしょ！」

やっぱりか。

「そうですね、なんだかISの調整をしましたね」

「あー、やっぱり」

なんか心当たりがあるんですか。

「やっぱりってなんか知っているんですか？」

「いやあ、実は簪ちゃん専用機持っていないのよ」

え？代表候補生なのになぜ？

「だってね、簪ちゃんの専用機の開発元はね・・・倉持技研なの」

「確かそこは・・・」

「そう、織斑一夏くんの専用機を制作したところな訳で・・・」

かんちゃん専用機の開発が打ち切られた訳か。

「でも普通ISはチームで造りますよね。かんちゃんは、一人でや  
ってるみたいでしたけど」

「それに関しては、私が原因ね。私が一人でISを完成させたから」

「…………ハア？今、何て言ったこの人。一人で？  
もう一回言おう。…………ハア？」

「そんな呆れた顔をしない！一人って言っても、七割方出来てたし、  
残りをね」

「呆れるのに十分なことですよ！」

大体のことはわかった。

多分、かんちゃんは楯無さんと並びたいんだと思う。

周りの人は楯無さんの妹のかんちゃんに期待をして、比べられる  
のが嫌なんだろう。

俺もそうだ。兄さんや姉さんたちと比べられ、周りの勝手な期待  
を受けて失望されて。

今のかんちゃんは、昔の俺のように見える。だから俺は自分は自  
分だと割り切って逃げたのだ。しかし、かんちゃんには、そんな風  
になってほしくないから手を貸してやりたい。

「楯無さん、かんちゃんの専用機制作って俺にも手伝えることないですかね？」

「フッフ」

楯無さんが微笑む。

「ど、どうしましたか？」

「うっん。簪ちゃんはいいい婚約者さんと出会えたなって思っただけよ」

「なにを言ってるんですか?!これは、幼なじみだからですよ」

「ハイハイ、ごちそうさま」

くっ!信じてないなこの人!

「とにかく、俺なにか出来ませんかね？」

「いや、斑鳩くんだったら十分力になるわよ。もしもの時は整備科





「くろっち、カッコイ」

「・・・そう言えば、斑鳩くんは方向音痴じゃあ・・・」

「「あ」

生徒会室に沈黙が訪れた。

## 7 翼（前書き）

今回はとても短いです。

しかも、内容が薄いというおまけ付きです。

## 7 翼

「どこにいるんだ？」

俺はかんちゃんを探している途中だった。確か整備室があったはずだけでも、どこの整備室だかわからずにいた。  
ああ、どこの整備室か聞いとけばよかったな。

「おい、くろっち！」

この声は！

「本音。どうした？」

「実はね、お姉ちゃんに手伝ってこい、と言われたの。」

手伝いつて、逆に足を引っ張るんじゃないか？

「あゝ！今、失礼なこと考えてたでしょ」

「そうだな、具体的に言おうか？」

「むー、くろつちいじわる！」

「どうでもいいから、どこにかんちゃんがいるかしらない？」

「どうでもいいって言ったろ！ひどーい」

だああ！面倒なことになったよ。俺は急いでるんだよ！

「かんちゃんがどこにいるかおしえようとおもったのにー」

「聞かせてください！」

「フフツ。わかればいいんだよー」

えっへん、胸を張る本音。

ええーい！話すのが遅いわ！もっと早く言えー！

「かんちゃんは第二整備室にいるよ」

第二だな。早速行くか！  
俺は走ろうとした。

「くろっち、第二整備室がどこにあるのかわかるの？」

「・・・・・・・・わからない」

しまった！？まだ来たばかりだから、どこになにがあるかわからないんだよな。

「くろっち、こっちだよ」

「わかったよ」

俺は本音に案内してもらっしかなかった。



その時頭にお姉ちゃんの顔が浮かんた。

優しく、優秀で、強く、魅力的な人。私では敵わない人。

でも時々、敵わなくてもいいんじゃないかと思う。私には斑鳩というヒーローがいる。

学園で久しぶりに会った時、斑鳩が大分変わっていた。

弱虫の雰囲気はどこにもなく、一人の男になっていた。

だから、私はお姉ちゃんに敵わなくてもいいから変わろうと思った。斑鳩に相応しい女になりたい。

斑鳩の隣に居たいから。

「……よし!……」

気持ちを入れ直して、ディスプレイを見る。

「へえー、ここが整備室か。結構広いんだな」

「当たり前なんだよー。だってたくさんのISをいっぱい整備するところだからね」

今の声って、もしかして!

「……斑鳩……。後……本音、邪魔」

「どーも、頑張ってますね」

「ひどいよ、かんちゃん。お手伝いにきたのにー！」

手伝い？つまり斑鳩も？

「まあ・・・あんまり力になれないかもしれないけど・・・な」

苦笑いしながら頭を掻きながら言い、顔は少し赤くなっていた。

「・・・ダメ」

「なんでだよ。三人でやったほうが効率もいいだろう」

断るのが以外だったのだろう。斑鳩の顔は驚きを隠しきれない。でもダメだ。この好意に甘えたら、斑鳩の隣にはいられなくなるような気がする。

甘えるだけで、斑鳩に迷惑をかけてばかりのダメな人間に思われる。

そんなのは嫌だ。私だけの、たった一人のヒーローがいなくなるのは堪えられない！

だから、これだけは自分一人で行いたい。



「かんちゃん」

「ダメ……。だから、どこか、行って」

「・・・もしかしてさ、これくらい一人で出来ないといけない、とか思っていない？」

「・・・ッ!？」

確信を突かれて動揺する。それが顔に出たのか、斑鳩はため息をつく。

「やっぱりか。なんでそう決め付けるんだよ」

「そ、それは・・・」

言ったらダメだ。言ったらきつと斑鳩は私に失望してしまう。  
嫌だ！斑鳩だけは、他の人ならまだ我慢できる。でも、斑鳩だけにはそう思ってもらいたくない！

「かんちゃん。この世の中、一人で出来ることなんて限られてるよ

「だから、人は協力して出来ないことを、出来るようにするんじゃないのかな？ 楯無さんだって例外じゃない」

「え？」

お姉ちゃんも？

「聞いたんだ。楯無さん、専用機完成するのに、いろんな人のアドバースを貰ってやっと完成したんだって。あの完璧な更識楯無がだよ」

お姉ちゃんが？ そんなの知らなかった。今まで比べられるのがいやで、ずっと避けてて知らなかった。

「だからさ、別に気にしなくてもいいんじゃない？ かんちゃんももう少し、俺に甘えなよ。な？」

斑鳩が笑いかけながら言う。その顔はまるで悪を倒し、弱いものを助けるヒーローのように眩しかった。

「・・・いいの？」

甘えていいのかな？

「ああ、なんでかshれないが、あんまり人がいないからな。大丈夫だろ」

「私も大丈夫だよー」

「・・・じゃあ、お願い・・・」

頭を下げて言う。今の私じゃあこの打鉄式は完成できない。

だから、

「力、貸して・・・」

「よし！じゃあなにから始めればいいんだ？」

「畏まりました！お嬢様ー」

「その、お嬢様は、やめて・・・」

お嬢様なんて言われると恥ずかしい。

・・・斑鳩に言われるならいい・・・なんて考えていない！  
少ししか、考えてないもん！！

「どうした、かんちゃん？顔が赤いぞ」

「き、気にしないで！なんでも、ない」

「だったらいいが」

そういうと斑鳩は、展開中のモニターを見るのに集中した。

私はそつと斑鳩の隣に肩を寄せるように立った。少し恥ずかしかったが、胸の高鳴りが心地良かった。

やっぱり斑鳩は私のヒーローだ。そう、改めて確信した瞬間だった。

## 7 翼（後書き）

12月27日 追加

どうも、学生逃避でございます。

今年ももうすぐ終わりますが、来年も頑張って書いていきたいと思っています。

本題ですが、年末年始の投稿についてですが、お休みさせてもらいます。

本来なら、24日の投稿に書けばよかったのですが、急に用件ができてしまいました。

誠に勝手ですが、宜しくお願いします。

## 8 翼（前書き）

明けましておめでとうございます。学生逃避です。

今年度最初の投稿になります。

これからもよろしく願います。

## 8 翼

最近、クラスが騒がしい。

その内容はもちろん、俺とかんちゃんのことだ。

「斑鳩くんってさ、更識さんと仲いいよね？」

「部屋も同じみたいだからね。自然とそう見えるだけだつて」

「でもさ、一緒に更識さんの専用機の調整してたんだよ！」

「ええー！嘘！？」

「本当よ。昨日も一緒に作業してたの見たもの」

がやがやと騒がしくなっている。

女子は元気だね。真相を確かめようと休み時間や放課後は必ず追いかけて来る。

おかげでこっちは疲れとストレスが溜まっていく。

「・・・ハア・・・」

憂鬱な気分をため息とともに外に出そうとするが、憂鬱な気分は晴れない。

一夏はこうゆつの鈍感だから平気かもしれないが、俺はデリケートだからな。

「あ、斑鳩くん」

「あれ？山田先生、どうしましたか？」

「はい、実は今週の土曜日に斑鳩くんの入試試験があるんです」

はて？入試試験は編入する前にやったような。

「試験ってなにをするんですか？筆記試験はやりましたし」

「ISの実技試験ですよ。斑鳩くんの場合は学園側が準備することが出来なかったんですが、ようやく出来たので土曜日に行くことが決定したんです」





- - - - -

- - - 放課後 - - -

「今日はもう遅いし、ここまでとしよう」

「ういいー、疲れた」

本音は机にべとおー、と寄り掛かった。

「ありがとう……。かなり、はかどった」

「俺はあんまり、力になれなかったがな。以外に本音が使えたからだよ」

「以外ってー、失礼だよー」

本当に以外だった。流石は虚さんの妹だな。少しはやるようだな。

「お腹へったなー。でねー、食堂に行こうよー」

「そっだな、かんちゃんはどうする？」

「・・・いいの？」

いや、俺が聞いているんだが。なぜ聞き返す？

「だって斑鳩、噂になって・・・め、迷惑じゃないかな・・・って」

なるほど、気にしてたんだ。その気配りはありがたいね。

「今更、どうしようが意味ないって。気にするなよ」

「・・・なら、行く」

「それじゃあ、食堂に向けてしゅっぱーっ！」

ぶかぶかの袖で手が見えないが、本音はしっかりと俺の手を掴む。  
そのためか、本音の母性の塊が俺の腕に当たる。

「・・・むう・・・」

かんちゃんが少し頬を膨らませながら俺を睨む。  
いやかんちゃん！俺のせいじゃないよね！？どうしたのさ？！

「ああ、かんちゃんもしかしてじえらしい、感じている？」

「・・・ッ！？そ、そんな、こと！」

顔を真っ赤にしながら言っても説得力が皆無だよ、かんちゃん。  
その慌てっぷりを見て少し、ほんの少し萌えたのは秘密である。

「本音、手を離せば済むことなんだから離せ」

「ええー」

「ええーじゃない！ともかく離せ。さっさと食堂に行くぞ」

無理矢理に腕から離すと、振り返らずに食堂に向かう。

「くろっち、そっぢじゃないよー」

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

まだよく場所が掴めていなく、道を間違うことがよくある。早く覚えなと！

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

食堂に着くと各自、注文の品をもらい食堂の一番奥の席に座る。  
かんちゃんは、かき揚げがのったうどん、本音は焼き魚定食、俺  
は煮魚定食と綺麗に別れた。

「いったきまゝす！」

本音は席に座るとすぐに食べ始める。いつも遅いはずなのに、なぜか速い。

「斑鳩、どうかしたの？」

「いや、気にするな。くだらないことだから」

「・・・わかった」

そういうと、かんちゃんは他人からの目からは無表情に見えるが、俺からすれば少し楽しそうな顔で、かき揚げをつゆに全て浸けた。

「なんだか楽しそうだな」

「そう、見える?」

「ああ、一応幼なじみでもあるし」

ここで婚約者と言ったらかなりの騒ぎになるだろうからあえて幼なじみと言ったのだが、

「・・・そう。・・・婚約者って言えばよかったのに」

かんちゃんがヘソ曲げて冷たくなりたした。  
かんちゃん、最後小さく言っただろうけど聞こえてたよ。  
だが、ここはあえて、スルーしよう。

「あ、そうだ。今週の土曜日は手伝えないんだ。すまない」

「え、どうして?」

「なんか実技試験みたいなのがあるんだ。それで」

「いまさら?」

「学園側が準備出来なかったんだと」

「へえー、わかった」

「頑張ってね・・・斑鳩」

「おう、任せとけ」

出来るだけ笑顔で言つと、周りが少し騒がしくなる。

なんか俺、変な事してないよな。かんちゃんも顔を赤くしてるし。

「本音、俺はなんかやらかした？」

「うん、おりむーみたいのに」

「？」

全くわからない。しかも一夏みたいのってまさか・・・。

まあ、どうでもいいか。今は土曜日どついう風に戦つか考えておかないと。





「……というわけで土曜日になりました」

「誰に言ってるんだ？」

「画面の前の読者様にですよ」（キリッ）

「……とにかく、試験を行うが準備はいいか？」

「・・・」

「くろつち、電波」

織斑先生、そんな痛い子見るような目はやめてくださいよ！？か  
んちゃんまで！

そして、本音！おまえだけには言われたくない！？  
仕方ないでしょ！台本に書いてあるんですから。その目は作者に  
向けてくださいよ！

「え、えーっと、そろそろ始めないとアリーナの使用時間は限られ  
ている訳ですし」

「や、山田先生が・・・まともなことを言っている！！」

「ひ、ひどいですよ、織斑先生！」

山田先生が織斑先生に涙目で迫る。

しかし、迫力がないためか子供が母親に泣き付くようにしか見え  
ない。

ちなみに母親は織斑先生だ。

「私はそんなに老けてないぞ。それに天然キャラの娘なんていらん」

あれまあ。そんなこと言って本心では満更でもないんじゃない。

「山田先生、ボコボコにしても構わない。・・・殺ってくれ」

「文字変換間違ってますよ、先生!？」

「間違っただけだ。私がそんなミスはしない」

いや、ミスであってほしい！  
でないと、いけませんってば！

「じゃ、じゃあ始めますね。斑鳩くん、ISを起動して下さい」

「はい、わかりました」

「・・・が、頑張っ！」

「くろっち、ファイト」

かんちゃんたちの応援を受け、動揺を抑えて腰に付いている懷中時計に意識を集中させて展開する。

「来い、夜烏<sup>よからず</sup>」

俺の体は光に包まれた。

## 8 翼（後書き）

・・・如何だったでしょうか？

もつと書ければいいんですが、全くの力不足でして・・・すみません。

そして、おこがましいかも知れませんが、誤字脱字がありますたら報告していただければ幸いです。・・・感想もお願いします。

## 9 翼（前書き）

今回も、シリアスなのか疑うくらいの薄い内容となっています。

また、アクセス数が3万を超えました。皆さんのおかげです!!  
ありがとうございます。

## 9 翼

試験が終わり、ピットに戻っていた。

山田先生って教師だけあって、強かったよな。シールドエネルギーが残り1なんて、漫画で主人公がライバルとのバトルじゃないんだから。

「・・・斑鳩、凄かった」

「くろつち、強いね」

気づくとかんちゃんと本音が来ていた。

「・・・これ」

「お、すまない」

かんちゃんからタオルとスポーツドリンクを受け取り、汗を拭く。  
ドリンクもキンキンに冷えていいい！



「そういえば、俺の実戦データ役に立つかな？かんちゃんのは戦闘スタイルが違うと思ったんだけど」

「う、ううん。参考になった」

「ならいいが……。なんか素っ気ないな。なんかあったのか？」

「!?!」(ブンブン)

かんちゃんは首がもげるんじゃないかってくらい左右に振っている。

こんな感じだったっけ、かんちゃんって？

「くろっち、データが取れたんだからー、かんちゃんの機体、造っちゃおうよー」

「お、なんだか今日は積極的だなあ。熱でもあるのか？」

「そついう日もあるんだよねえー、かんちゃん」

「う、うん。ある……と思う？」

？ってなんだよ！？自信ないのかよ！

「乙女にはいろいろあるんだよー！くろっちは気にしない」

「本音、お前には乙女心があるとは思えない自分がいるのだがどうすればいい？」

「そんな自分はシュレッダーにかけて細かくして、ごみ箱に捨てればいいよー」

さりげなく、怖い事を口に出しているな！？今はその笑顔が鬼に見えるぞ。

「それはともかく、かんちゃんの機体、やっちゃんおうよー」

「お、おお。着替えてくるから先に行つててくれ」

「・・・迷わない？」

「・・・」

「無理みたいだからー、待ってるよ」

「  
・  
・  
・  
すまん  
」

方向音痴が治ればいいんだがそう簡単には治らないみたいだし。この方向音痴が治る薬を誰か作って下さい。涙を堪えながら口ツカーに足を運ぶ。

[illegible]

「ふうー、もう動けません」

私、山田真耶はつい先程まで試験官をしてしていました。

相手は黒翼斑鳩くん。ISを使える男の子として、このIS学園に編入してきた生徒。見た目は暗い――じゃなかった、物静かな子だと思っていた。IS操作も素晴らしいの一言に尽きる。なにか、武道などをやっていたのだろうか。一つ一つの動きに無駄がない。あの大人しさは獣が獲物を捕らえる前のような、そんな静さに似ている。

「・・・・・・・・」

しかし、闘っている途中に心配になった。あの強さははっきり言うてしまえば、異常、危険だ。

「山田先生、大丈夫か？」

「織斑先生。は、はい・・・大丈夫だと思います」

織斑先生も少し眉間にシワを寄せている。

織斑先生は昔の斑鳩を知っているのだからなにか知っているだろう。私も教師なのだから生徒の事をよく知りたい。

「織斑先生、彼は一体・・・」

「山田先生」

私の言葉を遮るように言う。その言葉は重たく感じる。

「いくら教師でもあまり生徒の事に深く干渉するな・・・その事は忘れないように」

「・・・はい」

返事をする。織斑先生は静に部屋を出て行き、部屋に沈黙が流れる。

それは試験中の静けさとは違っていた。

誰かこの状況をなんとかしてくれないかな？

⌈  
•  
•  
•  
⌋

⌈  
•  
•  
•  
⌋

[illegible]

山田先生にあいさつしようと思していたら、織斑先生との話を聞いてしまった。

後でにしようとしたのだが、織斑先生に見つかってしまいこんな気まずい事になってしまった。

「・・・黒翼」

「・・・何ですか？」

織斑先生の声はなんだかいつものよう凜とした感じはない。

「山田先生はお前の事を教師して気にかけているだけだ。だから、あまり気にするな・・・」

「成る程。・・・努力しますよ」

「そうか。ならいいんだが・・・」

織斑先生は少し口を緩ませて頷く。

「それでは俺、人を待たせているんで失礼します」

かんちゃん達が待っているからな。早めに行かないとヘソ曲げた  
ら大変だしな。

「あの、織斑先生」

「ん？」

「一応言つときます。・・・あ、ありがとう、ございます」

「・・・ふん、さっさと行け。男があまり女子を待たせるなよ」

「では失礼します」

一礼して俺はかんちゃん達のもとに向かった。

- - - - -





「そ、そんなこと！斑鳩はしない！？・・・ハア！」

「フフッ。そんなのわかってるよ」

思わず勢い良く顔を上げると、本音はしてやったりと言わんばかりの顔で私を見る。

「何たって、くろっちはかんちゃんの前約者なんですよー」

「・・・うん」

「ならさ、くろっちの事信じてあげれば？そうじゃないと、私がくろっち貰っちゃうよー」

・・・本音に教えられるなんて、私まだまだなのかな？

本音の言う通りだ。私が斑鳩を信じてあげないといけないんだ。そうじゃなきゃ、前約者失格だよな。

「本音、斑鳩は・・・渡さない」

「えー、共有はダメ？」

「絶対ダメ・・・」

「わかったよ」

自然と笑いがこぼれてくる。

「すまないな、おそくなった」

たわいもない話をしていたら、斑鳩がやってきた。

「・・・遅い」

「すまないって言っているだろ」

「罰として、くろっちはぐなにかを奢ることー」

「なにかって何だよ？」

「・・・@カフェのパフェを」

「パフェか。・・・わかったよ、いつかな」

「いつかっていつー」

「知らん、ほら行かないと時間がないんだから」

そういうと斑鳩は私の手を握り、引っ張る。その手はとても温かいものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6264y/>

---

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

2012年1月14日16時53分発行